



直木賞作家

安部龍太郎さん

『等伯』を語る

直木賞受賞の瞬間は

午後7時のニュースで黒田さんが芥川賞に決まったと流れたので直木賞も7時30分ごろには発表があるだろうと思っていました。でもそこから40分ぐらいまでの10分間はもうだめだろうなと思っていました。受賞を聞いた瞬間は本当にうれしかったし、その場にいたみんなで抱き合って喜びました。

このひと月は自分でもびっくりするくらい忙しく、直木賞がどんなに影響力のある大きな賞なのか実感しました。話には聞いていましたが、実際に経験しないと分からないものです。うれしい忙しさです。

前回の直木賞候補から19年間は、また、『等伯』を書いたきっかけは

19年前は39歳ですから、それから10年くらいはまだチャンスはあると思っていました。しかし、50歳を過ぎたころからもう賞の対象外にされているんだろうな。結婚適齢期みたいな話で直木賞適齢期もあ

るんですよ。適齢期を外れてこの賞はもらえない。そう覚悟を決め、だったらどういう仕事をしていけばいいかを考え始めました。そう思って『等伯』に挑んだという思いが強いですね。

私は長い間、戦国時代の武将を書いてきました。武将たちは固定的なイメージができてきています。信長であれば信長の、秀吉であれば秀吉の。その上に歴史資料でしか彼らのことが分からないし、直接本人たちと対話することができません。ところが、絵師はたくさん作品が残っています。直接絵に触れることは、本人に触れることと一緒ですから書きやすい。400年の時を超えて本人と対話できる、そういう良さがあるな。武将を書くときは届かなかつたところに届くことができるかなというのが最初のきっかけです。

自分と等伯をよく重ね合わせてもらいましたが等伯のどこに共感をも

私は黒木から東京に出て作家を目指しま

直木賞とは
直木三十五の名を記念して、芥川賞と同時に昭和10年に創設されました。正式名称は「直木三十五賞」。各新聞・雑誌(同人雑誌を含む)あるいは単行本として発表された短編および長編の大衆文芸作品中、最も優秀なものに贈られる賞です。無名・新進・中堅作家が対象。授賞は年2回(上半期・12月1日〜5月31日まで)に公表されたもの・下半期・6月1日〜11月30日まで)に公表されたもの(行われています)。

選考委員は浅田次郎・阿刀田高・伊集院静・北方謙三・桐野夏生・林真理子・宮城谷昌光・宮部みゆき・渡辺淳一の各氏。
第148回芥川賞・直木賞の贈呈式(日本文学振興会主催)は2月22日(金)、東京丸の内・東京會館で行われました。受賞者の関係者、報道機関など約1400人が詰めかける中、安部龍太郎さんと朝井リョウさんに直木賞が、黒田夏子さんに芥川賞が贈られました。

ラストシーンの妻 清子の言葉は

した。等伯も能登半島の七尾から絵師になるために33歳のときに上洛し、京都の一流の画壇で勝負をするという決意をします。そういった生きざまや世の中に絵師として認められるようになるまでに18年間かかっています。私自身も雌伏の時期が長くありました。そういう悔しさや何くそという気持ちなどが自分と重なる部分があります。

小説の中で等伯が絵に向かう心情は芸術家としてはまっとうな精神ですが、仏教的視点から見るとそれは「執着」であり、「業」であつたりするんです。その「執着」を捨てなければ人として悟りに至らないとお釈迦さまは教えています。芸術的にはそこで「執着」や「業」を捨てたらその後には届かない。「執着」や「業」の深い人ほどいい芸術家になると言われています。等伯の一生は、絵に向かう「業」の一生であり、その「業」の強さが「松林図屏風」を通じて普遍へとつきぬけていく、その物語が『等



贈呈を待つ安部さん、朝井さん、黒田さん(左から)

伯』です。

『等伯』を書いてからの自身の変化は

今までは人物を自分の思うように引きずりまわすように解釈していました。その引きずりまわす意識は作家側の解釈です。それを捨てて人物への接近の仕方が身に付いたことですね。この方法は今後の作品にも生きてきます。例えば、バッターが打とうとして打ちにいても打てない、来た球を自然に体が反応して打たないと3割バッターにはなれない。つまりは、自然に反応する身体能力がついたんでしょうね。また、今度の受賞もその点が評価され、作品のレベルが一つあがったんだと思います。今までの作品とは明確に違います。

長谷川等伯という絵師の一生、当時、絵師として生きることがどういうことであっ

たか、どうして国宝中の国宝と言われる傑作「松林図屏風」が描けたのか、傑作を書いた等伯を私自身がどれだけ肉薄して書いているのか、また背景としても最新の学説を取り入れて戦国時代史の新しい解釈を試みていますし、その点も読んでいただきたい。

今後の作家活動は

残りの人生をどう使うかはすでに決めています。今から東北地方を舞台にした2つの物語を書き始めます。3・11以降の原発被害は深刻です。この深刻な状況で福島県にだけ犠牲を押し付けようという動き、利権の争いといったものが起こっています。そういう風には対応できない日本人の精神性って何だろう。日本という国は1500年もの間、東北地方を犠牲にして

この日本を形作ってきたという歴史があります。例えば、阿倍比羅夫の奥州征伐に始まり、幕末の戊辰戦争など。ずっと東北地方を犠牲にしてきて、また同じことをしようとしています。この日本人の精神性と東北地方の人が日本をどうとらえているのか、今こそもう一度見直す必要があると思います。

その先は、この日本の成り立ちは何だということまでさかのぼって考えたい。それには奈良時代の遣唐使が一番いいと思っています。遣唐使の阿倍仲麻呂などが訪れた中国の西安に行きましたが、当時の日本と中国の文化レベルが全く違います。彼らがその文化と文明を吸収して、日本を建国し、日本を形作っていかなければいけないと思ったことがよく分かりました。おそらくそれが最後のライフワークになると思います。

八女市出身の

直木賞作家

五木寛之さん(立花町出身)

昭和7年生まれ。早稲田大学第一文学部露文学科に進学。『さらばモスクワ愚連隊』でデビュー。『蒼ざめた馬を見よ』で第56回直木賞受賞。『青春の門』『戒厳令の夜』『親鸞』など著書多数。

杉本章子さん(酒井田出身)

昭和28年生まれ。『男の軌跡』でデビュー。『東京新大橋雨中図』で第100回直木賞受賞。『写楽まぼろし』『間諜洋妾おむら』『春告鳥 女占ひ十二月』など著書多数。



作家 安部龍太郎さん

昭和30年生まれ。国立久留米工業高等専門学校機械工学科卒。東京都大田区役所入庁後に図書館司書を務める。平成6(1994)年『彷徨える帝』で第111回直木賞候補、平成17(2005)年『天馬、翔ける』で第11回中山義秀文学賞受賞。

「理系に進んだ後に、エンジニアになるタイプではないなと思い始め、3年が終わると自分を見つめなおすために1年間休学。この時に文学に出会い、自分の進むべき道が分かった」という安部さん。「安部龍太郎」というペンネームは、デビューした年が辰年で次の干支の年がくるまでは作家としていたいという思いでつけられたそうです。郷里の黒木町について「『咲いた花見て喜ぶならば、咲かせた根元の恩を知れ』のまさに咲かせた根元が郷里の黒木町であり、中学校までの人間関係だと思っています」と話されていました。

主な著作

- 『関ヶ原連判状』1996年(新潮社)
- 『信長燃ゆ』2001年(日本経済新聞社)
- 『生きて候』2002年(集英社)
- 『天下布武』2006年(角川書店)
- 『恋七夜』2007年(集英社)
- 『道誉と正成』2009年(集英社)
- 『下天を謀る』2009年(新潮社)
- 『蒼き信長』2010年(毎日新聞社)
- 『レオン氏郷』2012年(PHP研究所)ほか多数

全国表彰のざぶん準大賞に仁田原菜那さん（木屋小4年）、ざぶん環境賞に山下稚尋さん（黒木西小4年）、星野智寛さん（立花中3年）、ざぶん文化賞の横田桜さん（宮崎市立小松台小4年）に安部さんから賞状などが贈られました。受賞者が手に持っているのは、入賞した文章にプロの手が加えられたアート作品。



ざぶん賞

水は生命の源。

「命」と「自然」の大切さを考える

安部龍太郎さんが「ざぶん」を語る

ざぶん賞とは

「日本や世界の将来、特に環境問題が心配。その環境問題が重要だということをも中学生の子どもたちに知らせるための活動を始めたい何がいろいろか」という金沢で大きな企業をしている人の話が出発点です。そこで、小中学生に環境問題、特に一番身近な水の問題について作文を書いてもらい、それをきっかけとして水や環境の問題について考えてもらおう、そして、表彰するという形で活動をやっていこうと始まったのが「ざぶん賞」です。



「ざぶん大使認定証」

趣旨には賛同していましたが、頼まれて仕方なく選考委員長を引き受けていました。しかし、

だんだんとかかわっていく間に、少しずつ僕自身の意識が変わりました。何とかいい活動にしたい、子どもたちが環境などに興味を持つきっかけにしてほしいと今は思っています。

「ざぶん」は水の音の「ざぶん」、文章の「ザ・文」の意味があります。最初は北陸3県が中心でしたが、10年の間に全国に広がり、11年目の今年は全国から約7千作品の応募がありました。応募した一人ひとりの児童・生徒に、その応募作品を打った「ざぶん大使認定証」を、「応募してくれて、考えてくれてありがとう」と思いを込めて贈っています。また、ざぶん大賞など入賞作品には、プロの挿絵画家などが作品をつけたアート作品を贈っています。これは普通の商

品などをもらうより、より子どもたちの心に届くのではないかと思います。

今年の応募作品は

福岡県地区などの作品は、昨年7月の九州北部豪雨災害によって自然の驚異、被害の大きさ、それが自分の生活にせまってくる恐怖と緊張感を書いたものが多くみられました。

ざぶん準大賞の仁田原菜那さんの作品は、水の大切さと怖さを「神様たちはおいかりだ」という言葉で表現してくれました。小学4年生ですが、被害を神様の怒りだ、そして神様の怒りを鎮めるためには、人間がちゃんとした生活をしないとだめなんだといったところまで目の届いた作品を書いてくれました。この「神様たちはおいかりだ」という言葉は、黒木の風土が生んだ言葉じゃないかなと思います。



ざぶん大賞などに選ばれた文章は、画家の西のぼるさん、原田維夫さん、百鬼丸さんら工芸作家、イラストレーターがアート作品に仕上げ贈呈されます。